

大会前は連覇を疑問視する声も：

今回、ユニバーシアードで優勝したサッカー男子。しかしここまで道のりは決して順風満帆なものではなかった。

チームは結成当時から前回の金メダルをとったチームと比較され、タレント不足、決定力不足、連覇を疑問視する声が多かった。前回金メダルをとったチームとは日本代表に定着しつつある浦和レッズの坪井慶介（福岡大学）、ジェフ市原の羽生直剛（筑波大学）、巻誠一郎（駒澤大学）、鹿島アントラーズの石川竜也（筑波大学）、深井正樹（駒澤大学）など数えたら足りないほどのタレント集団。それだけに今回の代表は比較されることもしばしばだった。

4月に行われた日韓戦では韓国にスコアこそ0-1だったが内容的には完敗を喫してしまう。すると観戦に訪れた川淵キャプテンには「まるで大人と子供みたい。全然戦えていない」と厳しい激を受けてしまう。西田監督も「連覇、連覇と騒いでいるがこの時点ではグループリーグ突破も危ないぞと感じた」と語っている。そしてこの時期にそれに追い討ちをかけるように主力または呼ぼうとしていた選手が相次いでケガをしてしまう。「この時点で戦える選手を選んだ」と最終選考後、監督は語ったがおおきく計画を崩されたのは間違いないだろう。

しかし、そんな日本代表にひとつの転機が訪れた。それは直前で実現したオランダへの海外遠征。実はこの代表、イギリスへの海外遠征をそれまでに二回計画していたのだが、政情不安やSARSなどでいずれも中止。これが順風満帆ではなかったひとつの理由である。そしてやっと実現した海外遠征（オランダ）で選手たちは自主ミーティングを行うなど

一戦一戦成長を見せていった。その時の様子を監督はこう語る。「オランダ遠征で本当に選手たちが変わったんですよ。試合することに良くなるのがわかりましたし、自分たちで考えてサッカーをするようになった」と。

結束の深さが優勝をもたらしした

そのいい雰囲気は韓国に入ってから継続された。練習後は笑顔が耐えないロッカールーム。唯一の一年生・原も「みんなが気を使ってくれて溶け込みやすかった」と語るように代表チームというよりも一つのチームとしてまとまり始めていた。そして、それは優勝後の岩政の言葉からも分かる。「今大会は僕自身も楽しかったですし試合にしても宿舎の生活にしても楽しかった。チーム全体で楽しめた。こんな言葉なかなか出てくるものではない。それだけ充実していたのだろう。」

その結束は試合をこなすこと深くなっていた。中国戦では「負傷した」ノブシゲのために絶対勝



4月に行われた日韓戦では不甲斐ない試合をしてしまった

優勝までの軌跡

優勝という最高の形で終えたサッカー男子・ユニバーシアード日本代表。しかし、ここまでは計画した遠征が中止になるなど苦難の連続だった。しかし、それを打破したのはチーム内の結束の深さだった。



<準々決勝・中国戦>
PK戦に勝利すると一目散にチームメイトが負傷した田中のもとへ。チームがひとつになっていた象徴的な出来事だった

とこんな言葉が出ていた。そして、勝利をおさめると皆が一目散に負傷した田中のもとに。「PKの前に「ノブのぶんまで頑張ろう」と言っていて、みんなでその分頑張ってくださいましたよ。感動しましたよ。ちょっと涙流すのがはやかかったですけど、あのノブの痛々しい姿を見ると、どうしようもなく出てきましたね」（西田監督）。そのチームのために力を尽くした田中の姿を見て岩政をはじめとしたおおくの選手が涙を流した。こうして結束を深めた日本代表は厳しい戦いを次々にものにし、ついに頂点に立った。山崎は「決定力不足と

いわれていたんでなんとか有三と点を取ってやろうと思っていた」と語った。西田監督も記者の「突出した選手がいませんが」と言う質問に「堀はスピードがありますから通用しますし、前田なんかもそうですね。中後もミドルパスなんかもいいものがありますし、まだまだ彼らは伸びるでしょう」と反論した。

これから彼らは各大学のチームに戻り更なるレベルアップに努めるだろう。依然として知名度の低い大学サッカー、その環境は変わらないが、しかし、彼らのような「ひたむきなプレーをする選手たちがいるかぎり大学サッカーは多くのＪリーガーを輩出するだろうし、成長を続けるだろうと今大会を見て感じた。そして同時にこれから始まる大学サッカーリーグが楽しみになってきた。

この中からまた日の丸を背負って活躍する選手が出てくるかもしれない。坪井選手などの例もあるだけに夢物語ではないだろう。今大会で逆境を跳ね返した彼らならきっとやってくれるに違いない。これからの彼らの活躍、楽しみにしたいと思う。